



エッセイ

後期高齢者の感慨

SCE・Net 松村 眞

E - 59

発行日

2013.11.04

後期高齢者になった。前からわかっていたことだが、市役所から健康保険変更の知らせがくると、よく今まで大過なく生きてこられたものだという感慨があった。私が物心ついた頃は戦争が激しくなっていたから、住んでいた東京の下町には軍服姿にゲートルを巻いた兵隊が闊歩していた。街には軍歌が氾濫していて、今でもそのいくつかを覚えている。「勝ってくるぞと勇ましく・・・」という歌は、戦線に赴く兵士を送りだす行進曲として歌詞もメロディーも優れていると思う。「海ゆかば・・・」のメロディーは荘厳で、これも心に浸みる優れた曲だと思っている。昭和 20 年の東京大空襲のときは、拝島に疎開していて難を逃れたが、都心の夜空が真っ赤に焼けていたのを覚えている。あの空の下で、私と同年代の子供も含めて 10 万人もの人が死んだことを知るのは、ずっと後のことである。

東京を焼け出されたので、鎌倉の祖母の家に移って小学校に入学したが、教室の一部が兵隊の宿舎になっていた。校庭には木でできたハリボテの戦車があり、若い兵隊が突撃訓練をしていた。登校する時は、学校に近付くと小学生も隊列を組み、行進しながら校門を通った。上級生が「歩調取れ」と声をかけ、軍隊のように足を高く上げて、勇ましげに入門したのである。空襲警報が鳴ると、生徒は裏山の防空壕に避難した。中は真っ暗なので、はぐれないように両手を前の生徒の肩にかけて奥に進んだ。下にはチョロチョロと水が流れていて、履物がぬげることがあった。でも列で歩いていたから止まることができず、大勢の子供が下駄や靴をなくした。鎌倉は寺院の多い古都なので爆撃を免れたが、飛来する戦闘機の気まぐれな機銃掃射で犠牲者が出るがあった。上空は京浜地区の爆撃から帰途につく B29 のルートだったから、大船観音が残った爆弾投棄の標的にされ、頭部が破壊されて鉄筋がむき出しになった。

7 才のときに戦争が終わり、もう戦災で命を落とす人はいなくなった。でも食糧事情が非常に悪かったから、学校給食はなく、母は兄弟 4 人分の弁当を作るのに苦労していた。米が乏しいので芋や豆を混ぜていたが、それでも昼に弁当箱を開けると半分ぐらい隙間ができていて、そこにおかずの漬物が散らばっていた。1 割か 2 割の子供は、そんな弁当も持ってこられず、昼食時には空腹を抱えて校庭で遊んでいた。いつもひもじく、大人も子供も栄養失調で痩せていた。私の世代の多くは、食べ物を残したり捨てるのに強い罪悪感がある。おそらく当時の、大げさにいえば飢餓体験の影響であろう。給食が始まったのは小学校 4 年の頃で、まずい粉ミルクを飲むのが苦痛だったが、欠食児童も栄養失調もいなくなった。ペニシリンの普及で結核が死病ではなくなったこともあり、ゼロ才から 14 才

までの子供の死亡数は、昭和 22 年の 38 万人から昭和 30 年の 12 万人に減っている。私の世代はそれ以降、不慮の事故と病気を除いて、生命の危険にさらされることがなくなった。

少年時代だった昭和 20 年代は、後半になるにつれて経済が発展し、徐々に生活水準が向上した。当時は燃料不足だったから内風呂が少なく、銭湯に行く人が多かったが、少しずつ自宅に風呂場を作る人が増えた。中学生の頃には鎌倉の郊外にも水道が普及したが、下水道の整備は遅れた。このためトイレを水洗にする家は、私の家もそうだったが、浄化槽を設置して処理水は近くの川に流した。トイレは臭くなくなり快適になったが、深夜も浄化槽のモーター音が聞こえ、安くもない電気代が気になった。燃料は薪と炭から石油に代わり、火鉢と練炭コンロが姿を消した。石油ストーブが増えて部屋暖房が広まると、灯油を補給するときに引火する火災が多発した。当時の石油ストーブは、灯油をストーブのタンクに直接補給する方式で、今のようなカートリッジ式ではなかった。このため、注意しても灯油が漏れやすく、灯油の扱いにも慣れていなかったからである。石油に続いて都市ガスが届くようになり、調理の主役は石油コンロからガスコンロに代わった。

電気洗濯機の販売開始は私が 15 才の昭和 28 年（1953 年）で、電気冷蔵庫の普及が続ки、家事労働の軽減に大きく貢献した。テレビの普及も 1950 年代である。高校生になっていた私は、自転車で 5 キロも離れた店頭のテレビを見に行き、力道山が大きな白人のプロレスラーを空手チョップで倒すシーンに興奮していた。わが家に初めてテレビがきたのは 19 才の時で、14 インチの白黒だったが、すぐに兄弟でチャンネル争いが始まった。私が大学 3 年だった 1961 年にはカラーテレビが普及し始めたが、色の調整が難しく、すぐに赤が強くなったり全体が黄色っぽくなった。1950 年代は、産業部門でも次々に開発された機械が、厳しい筋肉労働から人々を解放するとともに生産性が向上した。農村には田植え機や耕運機が増え、農閑期には農民が都市部に出稼ぎに出るようになった。今の中国が同じような状況である。農家の次男や三男は、学校を卒業するとすぐに臨時列車に乗って、都市の工場に就職していった。集団就職のための臨時列車は、1954 年（昭和 29 年）4 月の青森発上野行きから始まり、1975 年（昭和 50 年）まで 21 年間続いた。

私は大学に入ると、多くの学生がそうであるように、それまで読んでいなかった多様な本を読み始めた。高校時代の家庭教師の影響で哲学に興味を持った私は、ニーチェやショウペンハウエルに傾倒し、それから文学書を読むようになった。社会を知り始めたこともあって、自分の人生観を持ちたかったのである。当時の日本はアメリカとの安全保障条約が大きな課題で、学生運動も盛んだった。私もデモに参加して国会議事堂に押し掛け、「安保反対」と叫んでいた。賛成派と反対派の対立軸は、産業の発展にともなって拡大する市場主義と、労働組合が支持する社会主義だったと思っている。私も友人と喫茶店で、どちらが正しいのか青臭い議論をしていたが、私は左翼に近い意見だった。でも大学も専門課

程に進む頃には、学生運動に冷めてしまった。理由は左翼の主張が現実的でなく、観念的な言葉だけの世界に思えるようになったからである。家庭教師だけでなく、夏休みや冬休みには町工場でアルバイトをしていたから、少しずつ現実の社会の仕組みを理解するようになったからでもある。

1962 年には大学を卒業して社会人になったが、就職には全く苦労しなかった。大学 4 年になって初めて登校すると、教官からエンジニアリング会社の応募があるから入社試験を受けるようにいわれ、急いで成績証明書や戸籍資料を用意した。4 月 25 日が提出期限で 5 月の中旬に面接があり、今でいうエントリーシートもペーパーテストもなく、5 月 25 日には内定の通知がきた。でも当時としては初任給が高く、鎌倉の自宅から通えるので応募したのであって、何をする会社かよくわかっていなかった。入社すると、すぐに設備設計の仕事を担当し、毎日、計算書や設計資料を作っていた。入社当時は電卓もなかったから、計算尺とそろばんが主な道具だった。仕事を始めると、専門職としてはあまりにも未熟なのに気がつき、同僚と一緒に独身寮で勉強会を開いた。社会人になった私の 20 代は、このように専門職で始まったから、スペシャリストとしての能力向上が大きな目標だった。

30 代の仕事はプロジェクトマネジメントといわれる、いわば棟梁の仕事で、初めはうまくできなかった。自分の専門分野だけに目が行き、他の分野には関心が低く、人に仕事を頼んで任せるのが下手だったのである。マネジメントは特定分野の専門職ではないのだから、「できる仕事ではなく、なすべき仕事を優先しろ」と厳しくいわれた。40 代になると技術開発部門に移り、50 代は企画部門で仕事をし、60 才で会社を卒業した。よい仕事に恵まれ、大病もせず、リストラにも会わなかった。幸運な現役時代を過ごしたと思う。

60 才を契機に環境分野の調査を担う個人事業を始め、多くの会社の仕事をして 70 才の古希になった。還暦も古希も誰も祝ってくれなかったし、自分も意識しなかった。70 才なんて大勢いるから、「古代稀なり」ではなく、「今はざらなり」であろう。還暦も古希も死語になったのではないだろうか。その古希も過ぎて 75 才の後期高齢者になったが、幸いにまだ健康なので、残る賞味期限も充実させたいと思っている。これからの 5 年が健康に問題なければ 80 才で「終期高齢者」になり、さらに 5 年が無事なら 85 才で「末期高齢者」になるだろう。それが過ぎて 90 才になったらなんと呼べばいいのかわからないが、その頃までに消費期限を迎えるのではないだろうか。後期高齢者という呼称は、あまりにも事務的という意見が多いが、事実だから私は気にならない。加齢にともなって健康障害が出るだろうが、予防を考えるつもりはない。コントロールできないことは成り行きにまかせるだけで、事前に考える意味がないと思っているのである。終期高齢者と末期高齢者の呼称は、私が勝手に言っているだけなので世間では通用しない。90 才からの呼称も考えてみたが、適当な言葉が見つからない。誰か考えてくれませんか。 (おわり)